

琉球大学学術リポジトリ

ニワトリの白血病 ー特に肝臓肥大症についてー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 祐一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20508

ニワトリの白血病

特に肝臓肥大症について

養鶏をやっていく上に、一番大きい障害となっているものの一つは、鶏の白血病、特に肝臓肥大症ではないかと考えられる。しかも、この病気は、若雌が産卵を始めて、いよいよこれから利益を上げようという時期に多く発生するので、養鶏家の物質的、精神的損失も大きくなる。食い逃げ病といわれるゆえんである。この病気の発生状況も、一つの養鶏場で、昨年は沢山発生したが、今年は少なかつたということもあり、また同じ種鶏場からヒナを購入しても、沢山発生する年と少ない年があったりして、さっぱりわからない病気であると言われ、多くの学者によって研究されているにもかかわらず、現在も尚不明の点が多いのであるが、一部知られている事柄を記し養鶏家の御参考に供したい。

白血病とはどんな病気か

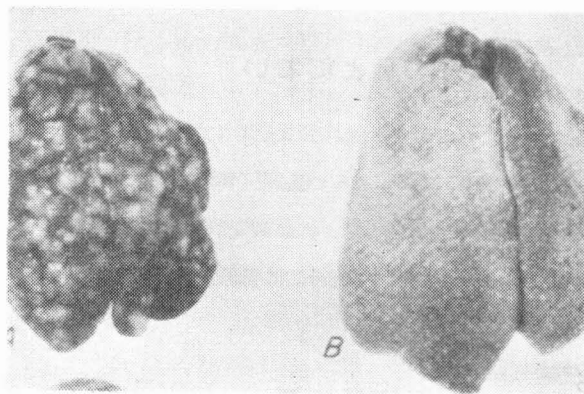
山口大学の石黒秀雄博士の説明によると、「わかり易い言葉で言えば、造血組織、または血液のガンである。またこの病群は、パイラス、またはパイラスような因子の感染により起るパイラス性腫瘍である」という。

この病気は、いろいろの症状を現わすのであるが、冲縄で私が最も多く見るのは、肝臓肥大症、脚弱症、めくら病の3つである。これをもう少し詳しく述べると、

1. 内臓型白血病

普通、肝臓肥大症として知られているものである。これは、産卵を開始した若雌に多く発生するが、相当に病状が進むまでは、外見上の症状は、みとめられないのが普通であるが病状が進むと、冠(トサカ)は、色あせて黄色となり、食欲は減退してやせてくる。又、緑色便をす

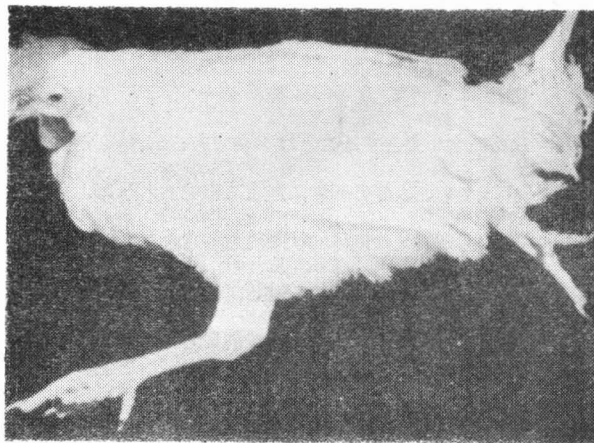
るようになる。これを解剖してみると、肝臓が非常に大きく肥厚し、色が変り、白斑や黄斑が生ずる。心臓も肥大する。白血病の70%は、この肝臓肥大症である。



肝臓肥大症

2. 神経型白血病

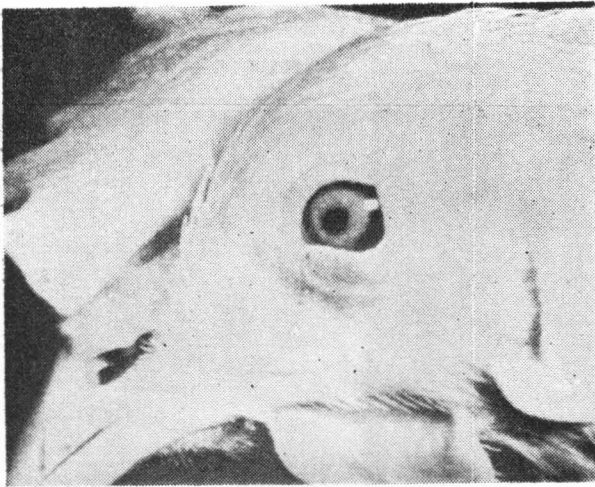
脚弱症といわれる病気の多くは、この白血病ではないかと考える。2-5カ月の若ヒナが侵される。短期間に、脚まひを起し、立ったりいったりすることが出来ず、又翼をダラリとたれ下げたりする。この病気にかかると立って餌を食うことが出来ないののでだんだん衰弱して死ぬ。



脚弱症

3. 眼型白血病

通常、めくら、または、灰色眼として知られている。眼の黒目の部分とかつ色の部分が浸されて、全体が灰白色となり、遂には、めくらとなる。黒目は、円い形が不正になり、あるいは、小さくなったりする。眼が見えないと餌を食うことが出来ないので、しだいに衰弱して死ぬ。



以上のように沖縄では、3つの型が多く見られるが、残念乍ら、治療法がないので、病気にかかったら早く処分した方がよい。

予防法も確定していないのであるが、現在、次のような方法がすすめられている。

①、白血病に対し抵抗力の強い血統或は系統から種卵をとると、ふ化したヒナは病気にかかり難いといわれる。米国ミシガン州にある白血病研究所の試験では、抵抗力の強い系統からふ化した鶏は、白血病による死亡率は1.2%であったが、抵抗力の弱い系統の鶏は、4.4%も死亡したという報告がある。又ニューヨークのコーネル大学でも1948、1949、1953年にふ化したヒナの試験で、弱い系統は、5.1%から6.4%死亡したにもかかわらず、強い系統は、2.7%から8.7%死亡したに

すぎなかったと報告されている。

②、育スウ時期の隔離

若いヒナ程本病に感染しやすいから、育スウ期間中は、本病のウイルスが伝染しないように、ヒナと成鶏とを隔離することが必要であり、またヒナの管理者は、出来ることなら、他の成鶏と接しないことが必要である。内臓型白血病、即ち肝肥大症のウイルスは、病鶏の糞、または尿により、まただ液や卵によって伝染する。

ヒナの感染を考えると、病気をもった雌鶏（外見上健康であっても）の卵からふ化したヒナは、生まれながらにして、この病気に感染していることになる。そして育スウ中に、ヒナのだ液が飲水によって他のヒナに伝染し、また糞によっても伝染する。病気に伝染しても、すぐ発病せずに、永い間、保菌鶏として過ぎて了うものもある。

なお、筆者は、本病の発生が、飼養管理や環境の良否とも大きな関係を有するように考えている。本春ふ化した若雌100羽を、3段式のケージで飼養しているが、産卵後3カ月の間に、12羽の肝肥大症が発生したが、その何れもケージの中段と下段の鶏で、上段からは1羽の死亡も出ていないことから考えて、同一舎内でも鶏のいる場所の温度や風通し等の環境が、白血病の発生と大きな関係をもつように考える。

以上述べた種鶏の選択、ヒナの購入先、育スウ時代の管理、産卵鶏になってからの環境や手入等あらゆる条件に十分意を用いて、養鶏の障害となっているこの白血病の発生を最少限度に食いとめたものである。

(松田 祐一)